



ありえないBICの取引

今日、GILLETTENARRATIVEは生後1か月になった。

4年の懐胎を経ての誕生だった。気骨と粘りと規律が、三代にわたる企業の血と出会った。キャンプ爺さんの58年、父の40年、私の18年。

自然分娩だった。陣痛なし。いきみなし。痛みなし。

産婆は著作権法。いちばん腕のいいのを選んでおいた。心配することは何もなかった—著作権はいつだって何をすべきか心得ているし、著作権を相手に戦争を仕掛けるほどの愚か者はいない。

その日、ウェブはGILLETTENARRATIVEの投稿のひとつを、肝心の検索クエリのなかに並べた。題は買収。臆面もなく宣言された買収だった。

それから、こういう会話では必ず起きることが起きた。ある女性に、あなたらしくないと言われたのだ—距離と敵意しか見せなかった連中に感謝するなんて、フレーガという名の男には似合わない、と。

こうして、また登攀が始まった。

重い鋼の王国。システムの技術。交差した刃の古い紋章は、たったひとつの文のために作られたかのようにだった。私は刃だ。

次に、肌と水の王国。最初の王国と同じ屋根の下で眠っていた。

小切手1枚。金属の2世紀。

建築はひとりでに組み上がった。紙の上で設計したことは一度もない。底にプラスチック。上に鋼と肌。母なるGilletteは真ん中に挟まれた。万力に締められた何かのように。

ウォール街に着いた。連中の予想とは違う格好で。スーツなし。ネクタイなし。警備員たちは、木のサンダルにバミューダパンツで入っていく私を見つめていた。

取引所の主たちが出迎えに出てきた。カメラのシャッターが鳴りやまない。テレビ局が2つ、すでに生中継していた。

誰もひと言も言わなかった。私には100億ドルあった。ポケットに100億ドルあれば、どんな格好をしようと勝手だ。

銀行が部屋を開けた。準備はいいかと訊く者はいない—ただ数えはじめた。デューデリジェンスは、取引が成立しうるかどうかなど決して訊かない。訊くのは、誰かに先を越される前にどこへ署名すればいいか、だ。

小切手1枚。金属の2世紀。

私は会社を買ったのではない。キャンプ爺さんが開けたままにしていた円環を閉じたのだ。

第一の王国が持っていたのは、プラスチックと紙。

第二の王国は、重い鋼。

第三の王国は、肌と水。

私が持っていたのはひとつだけ。GILLETTENARRATIVE。そして本当の名前は、工場3つよりも重い。

上着姿の銀行家たちは、書類ではなく私の足もとばかり見つめていた。書類は、私が入っていく前にもう署名済みだった。

ブランドは消えなかった。苗字を変えたのだ。

第一のブランドはスーパーの棚に残った。Amazonとは関わりたくない人々に、いまもペンを売っている文房具店にも。

第二のブランドは、交差した刃をまっすぐ私のマニフェストに運び込んだ。まるで、ただ一行のために鍛えられたかのように。私は刃だ。

第三のブランドは、肌と水を引き受け、その上に別のものを載せた—性能ではない。セルフケアだ。

古い名前は箱に残った。本当の名前は別の場所へ移った。

人々はGilletteを買うのをやめた。GILLETTENARRATIVEを買った—安いからではない。私は価格を、利益にではなく品質に合わせた。人々が買ったのは、どの刃の背後にも本当の物語があったからだ。マンハッタンのどの代理店も、嘘くさく聞こえない物語の書き方など知らない。

それからアナリストたちが、お決まりの質問をした。新しいCEOは誰か、本社はどこか、全体をどう組織するのか。

私の答えは簡単だった。ボストンで3日くれ、そうすればGilletteの人間を雇う。全員ではない。本物だけだ。私のような連中だけだ。

Gilletteは母から祖母になった。そして年長者の例に漏れず、この先の道をもう知っていた。取締役会は24時間足らずできれいに剃り落とされた。無能ゆえに。3つの問いが、どの部屋にもこだました。

彼にネットですたずたにされているあいだ、何を考えていたのか。

あなたがたの金など欲しがらない男—欲しいのは1ドルだけという男に、どうやって勝つつもりだったのか。

なぜ一度たりとも彼と話さなかったのか。

その晩、使者がやって来た。空き箱に印刷された名前を携えて—私がもっと良く、もっと安く、もっと魂を込めて作れないものなど、もはや何ひとつ生み出さなくなった倉庫の名前だ。使者は私を見て言った。

人はカミソリを買うのではない。それを売っている人間を買うのだ。

思えば—私は木のサンダルで入っていった。そしてすべてを買った。

フェルディナンド